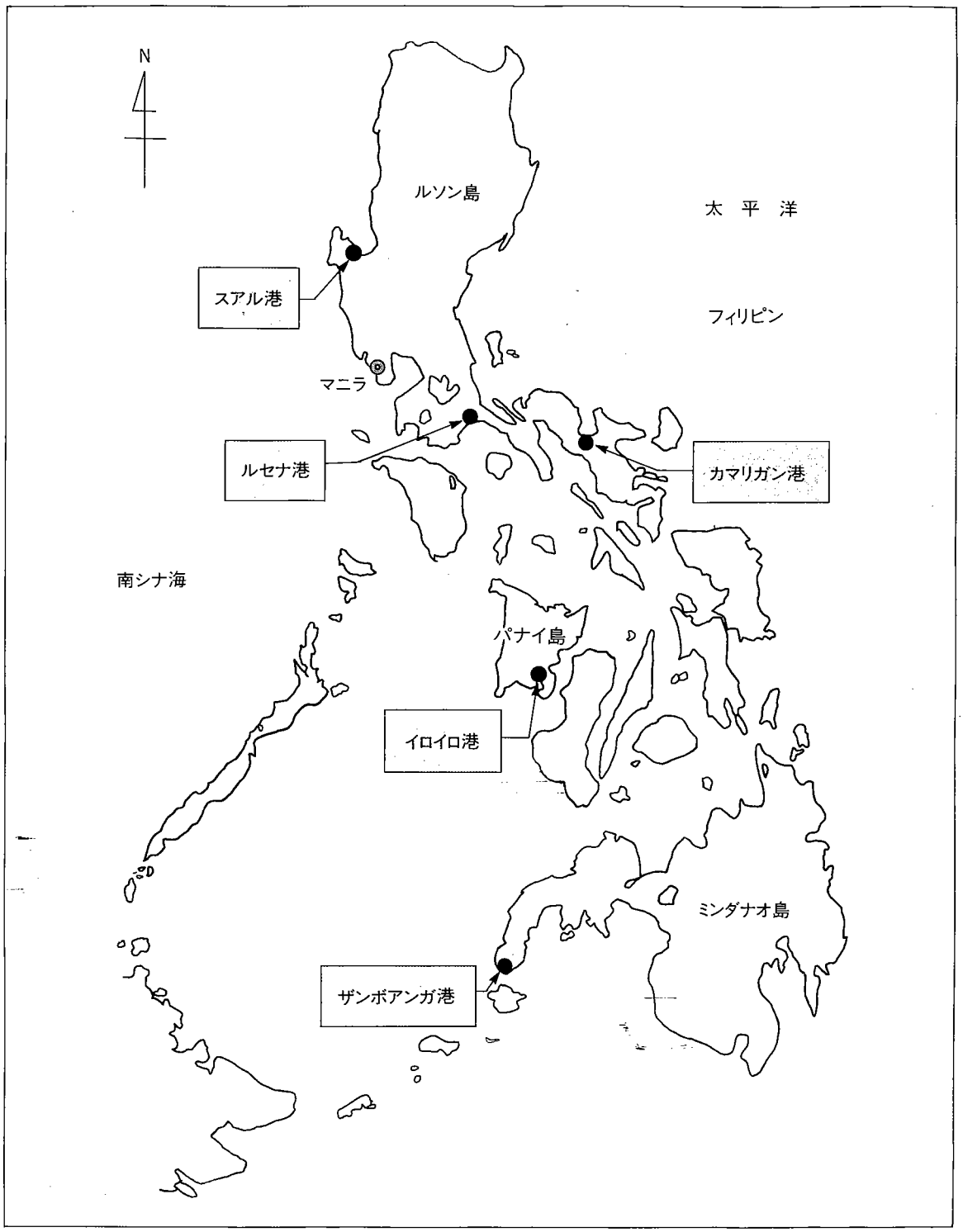
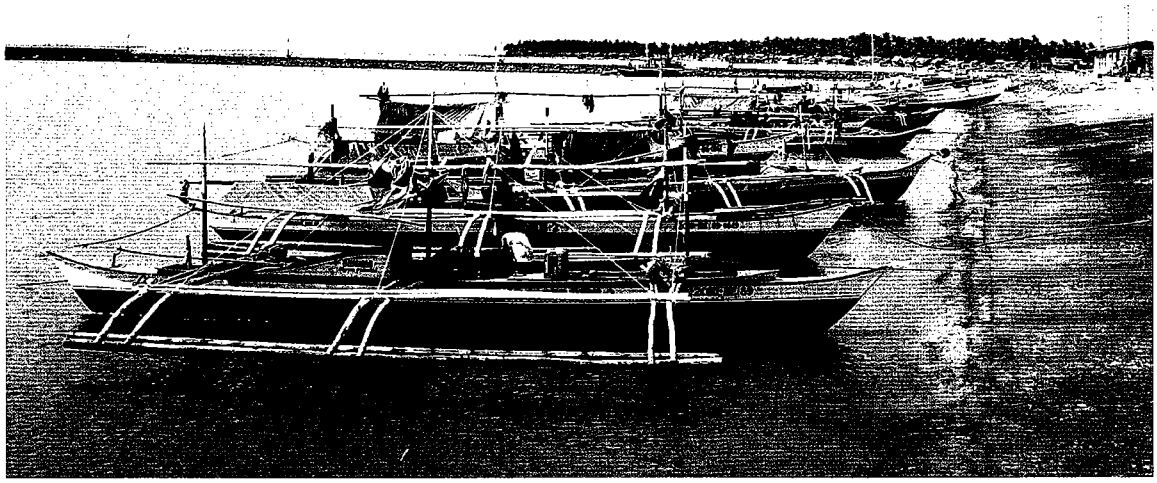
漁港建設事業・漁港拡充事業

フィリピン



漁港建設事業・漁港拡充事業



▲ イロイロ港の小型船用埠頭：漁民に良く利用されています。

■事業概要

	借款契約締結年月	借款金額
漁港建設事業	1978年　11月	83億4,000万円
漁港拡充事業	1982年　5月	36億3,000万円

フィリピンでは水産物が国民のタンパク源として重要な位置を占めていますが、人口の増加に対応し、かつ国民の食生活の改善を図っていくためには漁獲高を増加させるとともに、漁獲物の鮮度維持等の処理能力を高めることによって水産物の安定供給を達成することが重要な政策課題となっています。こうした状況の下で、同国政府は漁港整備計画を作成し、全国12カ所に港湾施設、冷凍施設等を有する近代的な漁港を建設することが計画されました。OECFは、この内の5港（イロイロ港・ザンボアンガ港・ルセナ港・カマリガン港・スアル港）を対象に「漁港建設事業」として機器調達、土木工事、及びコンサルタント雇用に必要とされる資金を供与し、浚渫・岸壁及び埠頭建設、製氷施設・冷凍庫の設置、及び魚市場の建設等が実施されました。当初、この漁港建設事業では、暫定的に決められていた上記5港の事業内容を詳細に決定するためのE／S(注)と、その結果に基づく漁港建設を実施することが計画されていました。そしてE／Sによって事業内容・事業費が詳細に検討された結果、全事業を実施するには事業費が不足することが判明したために、3港の冷凍施設については別途、「漁港拡充事業」として必要資金を供与しました。工事が開始されてから間もなくすると世界的な不況の影響を受けて同国の経済状況が深刻化し、また政権交代に伴う国内情勢の混乱も加わって一時的な工事停止を余儀なくされました。そこでOECFでは早期完成を実現するために、フィリピン政府との協議を重ね、同国の国内予算の実情を勘案して事業内容を見直すなどの努力を

継続的に行った結果、1992年４月のスアル港開港をもって全事業が終了しています。なお、最も早く開港したのはイロイロ港であり、1985年11月となっています。

(注) E／S：エンジニアリング・サービスの略。事業の実施に先立ち詳細な設計を行うことを言います。具体的にはF／S（フィージビリティ・スタディ）の見直し、現場の詳細なデータ収集・分析、詳細設計・入札書類の作成等が行われます。

■運用状況と効果

本事業の実施機関は公共事業道路省でしたが、完成後の運営は農業省の管轄下にあるフィリピン漁業開発公社が各港に管理事務所を設置することによって行っています。完成後の施設は概ね当初期待された通りに利用されており、特にイロイロ港への漁船寄港数は年平均40％という高い伸び率を示しています。

本事業で建設された５港での漁獲高は、漁船の操業回数及び漁船数の増加により着実に伸びており、また魚市場や冷凍施設が整備されたことによって漁獲物の処理も改善されています。従って、本事業は同国内における水産物の安定供給に加え、国民へのタンパク源供給にも貢献していると言えます。また、冷凍施設を利用した水産加工物の輸出も行われていることから、同国の外貨獲得に対しても相応の貢献をしています。なお、現地調査において聴取した漁港近辺の住民の声の一部を紹介しておきましょう。諸々の港湾使用料が徴収されるようになった等の回答もありましたが、ほぼ全員が以下のように漁港が建設されたことによる効果の方が大きいと述べていました。

- 水揚げ作業が非常に楽になり労働時間が短縮された結果、余暇が増えた。（漁民）
- 魚がたくさん集まるようになった。（仲買人）
- 市場は公共施設であるため、自由に参加できるようになった。（小売業者）
- 魚の流通量が増加し、値段が安定してきた。（県担当官）
- 漁港近郊の村の人口が1987年には約９千人であったものが、漁港が完成してからは約１万５千人に増加し、新しく商店ができるなど村が活性化した。（ザンボアンガ近郊村の村長）

（評価時期：1992年10月）

▲ ザンボアンガ港の水産加工場：従業員約500人の内、約300人が近隣村より雇用されています。